

月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
創刊平成元年 創刊26年目
創刊1989年 Nr.303

GEKKAN-WIEN 2014年9月号



Boris M. Kustodijew, Familienbild, 1905 Öl auf Leinwand 182,5 x 198 cm © Belvedere, Wien

ベルヴェデーレ下宮 企画展『銀の時代：1900年頃のウィーンにおけるロシア芸術 Silver Age. Russische Kunst in Wien um 1900』より
ボリス・M. クストディエフ（1878 Astrachan - 1927 Leningrad）「家族の肖像」1905年



杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 36



八月十一日〜十五日にかけて、第十五回国際伝熱会議が国立京都国際会議場において開催された。国際伝熱会議は、四年ごとに開催されるこの分野の最も権威ある国際会議であり、「伝熱オリピック」と称されている。一九七四年に第五回会議が東京で開催されて以来、このたび、四十年ぶりにわが国で開催されることとなった。本会議は六〇

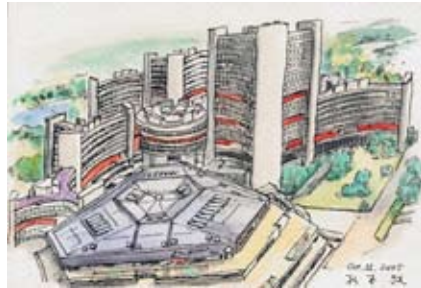
年以上にわたって研究者や技術者を構築する機会を提供してきた。今回の会議では、エネルギー、環境、交通、情報通信、バイオ医療など、社会への貢献を意識した「社会的な課題の解決に向けた熱科学の役割は何か?」との問いを掲げ、従来の研究領域に関する情報交換ばかりでなく、上記の問いに関連する特別講演、キーノート講演、パネル討論なども設けられた。本会議には四三ヶ国から約千百人が参加した。



十一日の開会では、吉田京大教授の司会により、笠木東大名誉教授の開会挨拶に引き続き、先の問いに関連して吉川元東大総長から「科学の助言のための科学」と題する特別講演があった。十四日には「原子力災害レジリエンスのための熱科学の役割」と題するパネル討論があった。議長は功刀京大教授、パネリストは北

村東北大名誉教授、コラデーニ米ウイスコンシン大教授、ハッサン米テキサスA&M大教授、それに筆者が務めた。レジリエンスが専門の北村先生の前に露払い的な役割で筆者は「福島第1発電所事故からのレジリエンス関連の教訓」と題する講演をした。その後のパネリストの講演が素晴らしいかったため、討論でもフロアから活発な発言が相次ぎ、議長によるまとめも決まり、参加者からの評判も上々だったのは幸いであった。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の国際会議場について述べたい。ウィーンの地下鉄U1のカイザーミューレン駅を降りると目の前に国際原子力機関（IAEA）など国連四機関が入るウィーン国際センター（VIC）のビルが建ち並ぶ。この国連シティーの一角に一九八七年にオープンしたオーストリア最大の会議場、オーストリアセンター・ウィーン（ACV）がある。ACVは最大四千人を収容できるホールを含め約百八十のホール・会議室と二二万平方メートルの展示スペースを有し、収容能力は最大二万人である。例年九月にはIAEA総会が開催され、世界から二十人近くが参加する。すぐ北に広大なドナウ公園が拡がり、西にドナウ川が流れ、環境に恵まれている。



一方、京都の地下鉄南北線の北の終点にある国立京都国際会議場は一九六六年に我が国初の国立の国際会議場として誕生した。京都議定書を採択した一九七七年の地球温暖化防止京都会議を始め、我が国の国際会議の歴史をつくってきた。十五六万平方メートルの敷地に本館、イベントホール、アネックスホール、日本庭園、駐車場などを備え、隣接するホテルと融合した会議専用エリアを形成している。同時通訳設備を備えた九会場をはじめ、七十余の会議室がある。目の前に比叡山がそびえ、北山もすぐ近くにあり、鴨川が会議場の下を流れており、こちらも環境が良い。両市とも歴史と伝統を誇る世界遺産都市であり料理も美味しいので、出席者が会議の前後等に観光を楽しめることも共通している。

余談であるが、筆者はウィーン赴任中、IAEA総会を始めACVでの国際会議に何回か出席した。二〇〇六年のIAEA総会では会場と交渉して、原子力機構の研究開発を紹介する我が国初の展示ブースを開設した。その後は原子力機構ばかりでなく、放医研や近年は産業界も展示ブースに参加している。国立京都国際会議場の中に入ったのは今回が初めてであったが、伝統の会議でパネリストを務めることができている。両市の有名な国際会議場に接することができた幸運に感謝しつつ、ウィーン在任時に事務所から描いたオーストリアセンター・ウィーンとウィーン国際センターのスケッチを掲載させていただく。

■杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■